

「山本勘助」と「山本菅助」

川中島合戦と「川中島合戦図屏風」

坂出市史編さん委員会編さん調査員 磯川いづみ

はじめに

戦国時代に「軍師」とされた「山本勘助」は、研究者によっては架空の人物とも言われていました。しかし、武田信玄(実名晴信、永禄元年[1558]12月出家)に仕えた「山本菅助」の存在が確認されました。

今回は、①「山本勘助」は果たして「軍師」なのか、②「甲陽軍鑑」に登場する「山本勘助」はどのような人物だったのか、③「川中島合戦図屏風」には、有名な一騎討ちがどのように描かれたのか、④実在の「山本菅助」はいかなる人物だったのか、お話ししていきたいと思ひます。

「甲陽軍鑑」について

天正3年(1575)5月長篠合戦の敗戦後、信玄の重臣春日弾正忠虎こうさか綱(高坂弾正)が信玄の言動や事績を書き記し、信玄の息勝頼の側近跡部勝資・長坂釣閑齋光堅あどべかつすけに対して贈ったもの。天正6年(1578)6月に高坂弾正が死去するまで書き続け、死後は被官大蔵彦十郎と弾正の甥春日惣次郎が書き継いだとする説が有力である。天正14年(1586)まで断続的に執筆が続けられた。

以前は、軍学者小幡景憲の著作と言われてきた。実際は小幡景憲の大叔父光盛が入手し、景憲の手に渡って忠実な写本を作り分冊を行った。景憲はそれを元に甲州流軍学の確立に努めた人物と言われている。

※以下「軍鑑」と省略して表記する

近世における「軍鑑」の受容

元和年間(1615~24)終わりから寛永年間(1624~44)初期に刊行され、武士を中心に多く読まれていたようである。

17世紀末、湖南文山訳「通俗三国志」が刊行され、いわゆる三国志が日本国内で広まった。近松門左衛門作の浄瑠璃「信州川中島合戦」(享保6年[1721]初演)には「今信玄が軍師に頼ん者、勘介じよしよならで日本に覚えしよかつりようず」とある。この作品には、信玄が劉備、勘助(介)が徐庶または諸葛亮、上杉謙信が曹操、直江実綱が程昱ていいくに擬せられている。ここで「三国志演義」の「軍師」が、広まっていくことになった。

時代が下るにつれ、「軍鑑」が軍学書から物語化されることで受容されると同時に、山本勘助=軍師という理解も広まっていった。現代に至るまで、小説・時代劇等で再生産されている。

戦国時代に軍師はいたのか

戦国時代には「軍師」と呼ばれる役職は存在しない。

戦国大名はピラミッドの頂点にいるが、いわゆるトップダウンの専制君主ではない。基本的に家臣との合議で物事を決めていく。当時の主従関係は、現在のイメージに比してルーズで、下が上を選ぶことができる。

「軍鑑」に登場する「山本勘助」

山本勘助とは

三河国出身で才能の信玄に認められ、足軽大将に登用された人物

「てを数ヶ所^(負)おい候へば手足も些不自由」で「いちがん」で色黒の「ぶおとこ」

= 隻眼で手足が不自由だった全国を見て回り城取り(城の縄張り=築城術)に長けていた

→仕官の際のPRポイント
たびたび信玄から諮問を受ける
永禄4年(1561)第4次川中島合戦で討死

信玄の「軍師」とされたのは近世の脚色

川中島合戦とは

越後・信濃・上野の国境付近の千曲川流域の川中島と呼ばれる地域で、信玄と謙信自らが出



陣した戦いの総称。武田方の記録「軍鑑」では5回、上杉方の記録「北越軍記」(以下「北越」と略記)では7回行われたとされる。

1回目は天文22年(1553)、2回目は天文24年(弘治元年、1555)、3回目は弘治3年(1557)、4回目は永禄4年(1561)、5回目は永禄7年(1564)で、この他「北越」では天文23年(1554)と弘治2年(1556)が加わる。

武田方の立場の「軍鑑」と、上杉方の立場の「北越」では、同じ出来事であっても書かれ方が異なり、記述には多くの違いがある。

「川中島合戦図屏風」

江戸時代に入る頃には「戦国合戦図屏風」といわれるジャンルの屏風が製作されるようになる。題材はさまざまで、川中島合戦以外にも、有名などころでは、関ヶ原合戦・長篠合戦・賤ヶ岳合戦・大坂冬の陣・大坂夏の陣などがある。

謙信と信玄の一騎討ちシーンの比較 (p.6と7)

図1 ミュージアム中仙道本(岐阜県瑞浪市)

謙信が馬上から振り下ろした太刀を、信玄は床几に座ったまま軍配で受けている。後に浮世絵などでも使われ有名となり、川中島古戦場の銅像もこれがモチーフとなっている。元禄9年(1696)~宝永7年(1710)に成立した。

図2 岩国歴史美術館本(山口県岩国市)

謙信が馬上から振り下ろした太刀を、信玄は床几から立ち上がって軍配で受けている。江戸前期の成立。「軍鑑」の川中島合戦を忠実に再現している。

図3 和歌山県立博物館本(和歌山県和歌山市)

謙信と信玄双方共、馬に乗って御幣川に入り太刀で切り結ぶ。発注者は初代紀州藩主徳川頼宣、越後流軍学者宇佐見定祐が製作に関与した。狩野派の絵師の作。上杉側からみた軍記「北越軍記」をもとに描く異色の屏風。

図4 勝山城博物館本(福井県勝山市)

川の中で謙信は信玄を追いかけて太刀を振りかざし、信玄はそれを軍配で受けている。岩国本と和歌山本の折衷と言える。和歌山本と図像が共通する点があることが特徴。江戸後期の成立とされる。米沢市立上杉博物館本(山形県米沢市)も同様の構図である。

図5 長野県立歴史館本(長野県長野市)

謙信が白馬に乗って刀を振り下ろし、信玄が床几に座ったまま軍配で防いでいる。幕末期に町絵師クラスによって製作されたといわれ、幕末期には大名家だけでなく、町絵師が製作するほど普及した屏風であったようである。

→同じ屏風でも描かれ方に違いがあることに注目。

⇒依頼主や絵師、屏風が成立した時期の川中島合戦のイメージがそれぞれ違う。

戦国時代の戦記が軍学書となり、物語として受容されていく過程と重なるのではないだろうか。

実在の「山本管助」

「軍鑑」に登場する「山本勘助」は、実在性が疑われていた。しかし新史料の発見により、「山本管助」の実在が確認された。

武田氏家臣山本管助の実態

武田氏への仕官は確定できないものの天文13年(1544)3月頃と考えられる。

天文17年(1548)に関銭100貫文を宛行われる

弘治3年(1557)、北信濃の市河氏に対して信玄の命を伝える使者となる

→市河氏が離反しないようにする交渉

永禄元年(1558)、信玄は管助の報告を受け軍事行動に関する「調談」と、「宿老」の小山田虎満(「武田家の四宿老」といわれる一人)の病状を見舞い、甲府に戻って報告するよう指示した。

→当時管助は北信濃方面にいた

⇒実在の「山本管助」は北信濃方面の軍事活動に関与していた

おわりに

山本勘助と山本管助の関係性

①説：音が同じなので単に宛字であって同一人物である

②説：両者が同一人物とは論証できない。管助のみ実在していた

③説：両者が同一人物とは論証できないが、モデルであった可能性が高い

⇒有力なのは③説

「軍鑑」や「北越」に記される川中島合戦が、近世に入ってからそれらをベースにして「川中島合戦図屏風」が描かれるようになった。軍記の出版や屏風によって、大局的に見れば単なる局地戦とまで言われていた川中島合戦の知名度が一気に上がり、それは現代でも続いている。

武田氏滅亡後に甲斐・信濃を押さえたのが徳川家康だったため、徳川家中には、かつての武田氏家臣が多く残っていた。また、“神君家康公”が唯一敗れた相手ということもあり、近世には信玄を尊ぶ風潮が残っていた。「軍鑑」が広く受け入れられた原因の一つには、そういったこともあるのかもしれないのではないだろうか。それが、各種文学作品のモチーフとして使われ、武士だけでなく、広く民衆にも流布され、現代にも繋がっているとと言える。

参考文献

- 黒田基樹『戦国大名 政策・統治・戦争』（平凡社新書 平凡社 2014）
酒井憲二『甲陽軍鑑大成』第1巻本文篇上、第4巻研究篇（汲古書院 1994、1995）
高橋修監修・文『決定版 図説戦国合戦図屏風』（学習研究社 2002）
高橋修『【異説】もう一つの川中島合戦 - 紀州本「川中島合戦図屏風」の発見』（新書y 洋泉社 2007）
平山優『戦史ドキュメント 川中島の戦い』上・下
（学研M文庫 学習研究社 2002）
平山優『山本勘助』（講談社現代新書 2006）
丸島和洋「戦国時代に「軍師」はいたのか？ - 官兵衛らが称された「軍師」の正体 -」（『歴史読本』2013年5月号 2013 新人物往来社）
丸島和洋『戦国大名の「外交」』（講談社選書メチエ 講談社 2013）
山梨県立博物館『実在した山本管助』（2010）
山梨県立博物館監修・海老沼真治編
『「山本管助」の実像探る』（戎光祥出版 2013）



図1 ミュージアム中仙道所蔵本

図2
岩国歴史美術館所蔵本



図3
和歌山県立博物館所蔵本



図4
勝山城博物館所蔵本

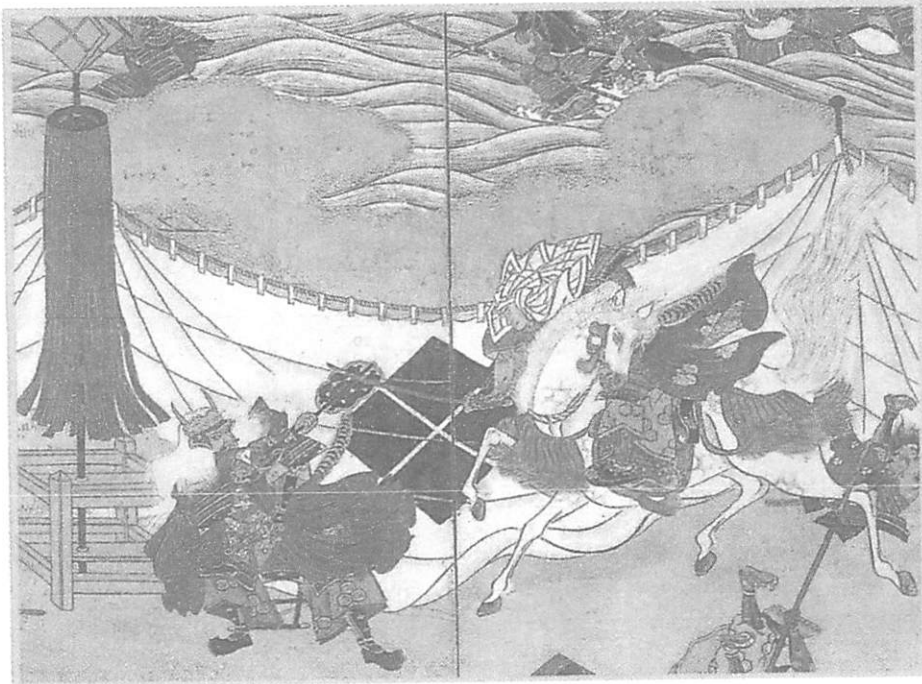


図5
長野県立歴史館所蔵本